

『私の』 作：ポチ子

『私の』 作：ポチ子

私の言葉に価値はない。

私には価値がない。

そういえば、

小さい頃からそうだった。

部屋に飾られている表彰状。

どれも姉の名前。

絵も、作文も、工作も、

姉は良くできた。

私はどれもできない。

でも一番の問題は、

私が、

自分の絵を、作文を、工事を、

好きだったことだ。

好きだったから、

褒められないのが嫌だった。

納得いかなかった。

だから、また書いた。

分かってくれる人がいる。

そう思ったかったから。

絵がダメなら、漫画を描こう。

作文がダメなら、小説で。

工作は別にいいや。

結局、褒められるのは、

いつも姉だった。

友達だった。

知らない同級生。

テレビで見た年下の子。

私じゃなかった。

華も才能もない。

『私の』 作：ポチ子

それだけの話。

自分のことが好きだけど、

評価なしに愛せるほど、

強くない。

私の作品に価値はない。

私には価値がない。

書くのは止めてしまえ。

辞めた方がいい。

価値が無いのだ。

価値は無いのだ。